

新年の石田会長ご挨拶

明けましておめでとうございます。

昨年を振り返りますと、世界経済は、感染の拡大・縮小の動向等に応じて、地域毎に時期や程度は異なっておりますが、経済活動が再開により、2021年夏以降、世界全体として景気回復は持ち直しの傾向に転じてきています。

米国では、ワクチン接種が広がる中、経済活動は順調に拡大基調を辿ってきています。



一般社団法人 日本伸銅協会
会長 石田 徳和

欧州では、一部の国では昨年秋以降に新規感染者の急増により規制強化が拡大されましたが、米国同様にワクチン接種が早い段階で進んだことで、追い風となり、景気回復傾向を維持していますが、感染再拡大の動きも見られ予断は許されない状況です。

一方、中国においては、景気の回復が先行しましたが、不動産価格の急騰や環境規制の強化により回復が鈍化してきています。

また、ASEANなどの新興国においては、新型コロナ感染の長期化や再拡大による外出規制、一部でのロックダウンがあり、回復・成長への妨げとなり、成長率は米国や欧州、中国を下回るとの見通しであります。

我が国経済については、ワクチンの接種が米国、欧州や中国に比べ遅れた影響もあり、個人消費を中心に回復は遅れたものの、その後急激にワクチン接種が進んだことで、経済活動も徐々に再開し、回復基調にあります。

しかしながら新たな変異株の影響は不透明な状況です。

このような状況下、私どもの伸銅品需要は、国内の自動車・半導体関連を中心に好調が続いており、自動車の電装化、5G、DX、再生エネルギーの

普及に伴い、伸銅品の電子部材としての需要は継続することから、増加傾向に推移するものと見込んでおります。

こうしたことから2021年暦年の伸銅品生産は、主要品種はいずれも増加し、対前年13.2%増の77万トン（2019年比+2.5%）は超える程度となる見通しです。

2021年の伸銅品の需要につきましては、自動車や半導体等を主な需要先とする「板条製品」は足元では堅調に推移しております。

「黄銅棒」につきましては、建築部材などインフラ関連分野ごとに違いはありますが、コロナ禍での需要減退から回復傾向にあります。

「銅管」については、足元で半導体不足の影響がでていますが、東南アジアなど成長市場で需要増が見込まれます。

日本伸銅協会が昨年秋にまとめました中期需要見通しにおいては、「板条製品分野」では一貫した伸びを見込み、「銅管」や「黄銅棒」も回復基調を辿り、脱炭素化による新規需要も期待される一方で、化石燃料を使用する市場が縮小する可能性も考えられる等、分野毎に増減はあるものの、「伸銅品全体」としては緩やかに成長すると予想しております。その結果、「2025年度の伸銅品需要の合計は、82万8千トン」と見込んでいます。

そのような中でも、新型コロナ禍をきっかけに、市場は急激に変化しております。

伸銅品を取り巻く環境においても、製品の軽薄短小化の進展、中国をはじめ近隣の伸銅業の技術水準の向上、原料高騰による他素材との競合等、決して安心できる状況ではありません。

これらに対応をしていくには、いかにプレゼンスを向上させるかが重要であり、それには、日本の伸銅品の特徴である「高性能かつ高品質で、魅力のある製品」を今後も提供していくことに他なりません。また、地球環境の問題にも取り組んでいくことが重要です。

環境問題への取り組みの重要性がますます高まる中、伸銅協会では、本年3月に「SDG s」に対する協会としての姿勢」について示すことを計画しております。

コロナに向けた内容を踏まえた「伸銅品技術戦略ロードマップ」の改訂にも今後着手いたします。

そして本年はNEDOの新しい技術開発プロジェクトに、「材料開発におけるデータサイエンスの導入に関する研究について」への応募も検討中です。

リサイクル原料につきましては、資源を全量輸入に頼っている我が国において、循環型社会の重要性とともに品質維持、安定供給のための重要な課題であります。

安全、品質、コンプライアンスについては、当然ながら、最重要事項として位置づけており、これらにもしっかりと取り組んでまいります。

また、伸銅品に関する新たな需要開拓を進めるため、基礎となる産学の連携による銅材料の研究開発を活発化し、今後の伸銅業の発展に向けた取り組み強化を図ることは重要な課題であります。

日本銅学会では、講演大会を毎年開催しており、その講演内容をまとめた学会誌「銅と銅合金」を発刊しており、昨年にはJ-STAGE上に掲載論文の無料公開をはじめております。

今後も銅に関する産学連携の研究が一層推進されるよう、「日本銅学会」を支援して参ります。

日本伸銅協会は、今年もこうした課題の一つ一つに全力で取り組んでまいり所存でございます。